

令和6年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

1 附属高等学校平野校舎の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

(2) 所在地

大阪市平野区流町 2-1-24

(3) 学級数・収容定員

9学級（1学年3学級） 収容定員 360人（1学級40人）

(4) 幼児・児童・生徒数

348人（男子141人・女子207人）

(5) 教職員数

校長(併任)1、校舎主任(併任)1、副校長1、主幹教諭1、教諭21(うち任期付教諭4)、
養護教諭1、中学校併任教諭3、非常勤講師11、ALT1、事務補佐員5、用務員2(うち中学校併任1)

2 附属高等学校平野校舎の特徴

1学年3クラスの小規模校である特徴をいかし、生徒一人ひとりの個性を伸ばし、幅広い学力の向上、自主自立の精神の涵養に取り組む。文部科学省の「ワールド・ワイド・ラーニングコンソーシアム構築支援事業・拠点校」に指定され、国内外の高校や大学、関係機関と連携したカリキュラムとあわせて、多様性を尊重し、グローバルな課題解決に向けて行動するイノベティブなグローバル・リーダーの育成に取り組んでいる。

3 附属高等学校平野校舎の役割

- (1) 大阪教育大学と連携し教育研究に取り組むとともに、平野五校舎の共同研究を進める。
- (2) 本学の教育実習機関として実習生を受け入れ、適切な指導を行う。
- (3) 教育に関する理論を研究し、教育実践に役立てる。
- (4) 本学が行う現職教員の再教育の一端を担う。

4 附属高等学校平野校舎の学校教育目標

- (1) 学力の向上をめざす健全で創造性豊かな人格の育成
- (2) 国際的視野に立ち自他を敬愛する人格の育成

5 附属高等学校平野校舎の学校教育計画

○学校教育計画

- (1) 一人ひとりを大切にす校風と少人数制という恵まれた学習環境を生かし、学力の向上をめざす健全で創造性豊かな人格を育むとともに、自他を敬愛しイノベティブなグローバルリーダーを育成する。
今年度：a. 授業を通して教科のもつ魅力や専門性を伝え、生徒の知的好奇心を高める。
b. WWLプログラムである「グローバル探究」「海外研修」「国内外の連携機関との学び」を通し、グローバル・リーダーに求められる資質・能力を育成する。
- (2) 生徒が、様々な困難を乗り越えて、自己の分析に基づいて描く自分になろうとする力を養う教育活動を推進する。
今年度：a. 一人一人の進路実現をサポートするため、効果的な情報活用と組織的な指導を進める。
- (3) 生徒に「自他の生命を尊重し、協働する力」を育む。
今年度：a. 生徒が主体となる場や自己を振り返る場をととし、基本的な生活習慣を確立し、自主自立の精神や人権尊重の精神を涵養するとともに自己教育力を育成する。
b. 少人数規模の良さをいかし、生徒一人一人に寄り添い、個を伸ばす。
c. 安全・安心な学校づくりへの取組を充実させる。
- (4) 平野五校舎における共同研究と教育実習の推進、セーフティプロモーションスクール (SPS) 認証への取組を推進する。
- (5) 教職員の働き方改革を推進する。

6 附属高等学校平野校舎 令和5年度重点目標(評価項目)、具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	<p>(1)学力の向上をめざす健全で創造性豊かな人格の育成</p> <p>(2)国際的視野に立ち自他を敬愛する人格の育成</p>
学校教育計画	<p>(1)一人ひとりを大切にす校風と少人数制という恵まれた学習環境を生かし、学力の向上をめざす健全で創造性豊かな人格を育むとともに、自他を敬愛しイノベーティブなグローバルリーダーを育成する。。</p> <p>今年度 a. 授業を通して教科のもつ魅力や専門性を伝え、生徒の知的好奇心を高める。</p> <p>b. WWLプログラムである「グローバル探究」「海外研修」「国内外の連携機関との学び」を通し、グローバル・リーダーに求められる資質・能力を育成する。</p> <p>(2)生徒が、様々な困難を乗り越えて、自己の分析に基づいて描く自分になろうとする力を養う教育活動を推進する。</p> <p>今年度 a. 一人一人の進路実現をサポートするため、効果的な情報活用と組織的な指導を進める。</p> <p>(3)生徒に「自他の生命を尊重し、協働する力」を育む。</p> <p>今年度 a. 生徒が主体となる場や自己を振り返る場をととし、基本的生活習慣を確立し、自主自立の精神や人権尊重の精神を涵養するとともに自己教育力を育成する。</p> <p>b. 少人数規模の良さをいかし、生徒一人一人に寄り添い、個を伸ばす。</p> <p>c. 安全・安心な学校づくりへの取組を充実させる。</p> <p>(4)平野五校園における共同研究と教育実習の推進、セーフティプロモーションスクール(SPS)認証への取組を推進する。</p> <p>(5)教職員の働き方改革を推進する。</p>

年度重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (*評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた 改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)a 授業を通して教科・科目のもつ魅力や専門性を伝え、生徒の知的好奇心を高める。	教員研修の実施 「各教科・科目」「総合的な探究の時間(グローバル探究)」「WWLのプログラム」について、カリキュラムマネジメントの視点にたった連携と改善の強化	各教科・科目の授業について教員研修(大阪教育大学・八田幸恵准教授)探究学習研修会を3回行い、「コンセプトベースの授業づくりを進めることについて共通認識を深めた。	コンテンツベースの授業との違いも踏まえながら、改善点を明確にした。	A	研修の成果を授業に活かし、教員間で確認しながら次のステップへと進めてほしい	A	PDCA サイクルでステップアップを繰り返し改善を進める。
	学習指導要領の主旨に基づく授業の工夫(生徒が主体的に取り組む授業、探究活動を導入した授業)への組織的な取組	生徒の知的好奇心を喚起する授業や探究活動を組み入れた授業を各教科で検討し実践した。その成果は教員間で共有するとともに、本校の研究発表会及び平野五校園共同研究発表会(11月)、附属教員と大学教員の研究交流会(3月)等において発表・発信した。	探究活動等を組み入れた授業改善は4年目であり、過去の取組をふまえながら各教科の実践を広げた。	B	さらに教科間の連携を図り、コンセプトベースの学習の研究を進めるとよい。	A	教員の専門性を高めるとともに、探究活動の導入等について教科間の連携を図りながら進めていく。これらの成果を研究発表会等で発表する。
	教員の授業力の向上 *学校診断アンケート(生徒)の授業に関する肯定的意見 80%以上	進路研究部が授業見学期間を設定し、教員が授業を相互に見学し、評価シートを活用しながら意見交換を行った。 *「生徒が意欲的に取り組むよう授業を工夫している」肯定的意見 80.6%(昨年度 83.9%) 「授業では自分の考えをまとめたり発表したりする機会がある」肯定的意見 82.1%(84.5%)	教員間の授業見学と評価シートによる意見交換の仕組みを取り入れた。	B	教員相互の授業見学と意見交換は重要であり、継続してほしい。	A	生徒の知的好奇心や探究力を高めるため、進路研究部が中心となり、教員相互の授業見学と教科間の連携、教員研修を継続する。
	三観点による評価、主体性の評価に関する研究 *主体性を評価するルーブリックの改善と活用	三観点による評価の工夫について集約するとともに、平野五校園共同研究において「主体性コン・ルーブリック」を具体的に最適化するように取り組んだ。	五校園コン・ルーブリックのさらなる実践活用	A	教科間の評価方法の共有を、さらに進めることが重要である。特に主体性コン・ルーブリックの成果検証も必要と考える。	A	特に「学びに向かう力」の評価について主体性コン・ルーブリックの活用研究を深めていく。

b WWLプログラムである「グローバル探究」「海外研修」「国内外の連携機関との学び」を通し、グローバルリーダーに求められる資質・能力を育成する。	「グローバル探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」(総合的な探究の時間)のカリキュラムの改善と充実 *生徒の外部機関での発表5件以上、海外の高校生との共同研究1件以上	WWL推進委員会と学年が協働し、昨年度の課題を改善した年間カリキュラムを作成し授業を実施した。 *生徒の外部機関での発表5件あったが、海外高校との共同研究はできなかった。	グローバル探究で活動した内容を生徒は主体的に発表することができた。	B	各学年とも生徒が意欲的に取り組んでおり、また、他校生との取り組みも進められ、WWL事業の成果が認められる。	A	生徒の探究活動がより深まるため、教員の専門性を考慮した指導体制とする。また、大学教員からさらに指導が得られるよう工夫する。
	「海外研修」を通した学びの充実	「ベトナム研修(2年全員)」を計画どおり実施した。現地の大学と交流することができた。 「カンボジア研修(1,2年希望者)」には25名が参加し、現地高校生や大学生とも交流し、社会課題について学びを深めた。	「海外研修」では、その目的の達成のため、事前学習と事前打合せを繰り返し実施した。	A	いずれの海外研修もWWL事業としての目的を達成している。	A	海外研修では、学びを深めるプログラムをさらに検討していく。
	国内外の連携機関との学びの充実 *大阪教育大学教員研修留学生との学びを10回以上設定	大阪教育大学の教員研修留学生が毎月2~3回放課後來校し、本校生との学びを計画的に実施した。 *大阪教育大学教員研修留学生との学びを年間21回実施。	留学生との放課後の学習は、大学の担当部署や国際交流コーディネーターのサポートのもと、実施した。	A	大学や留学生との交流が大変充実しており、生徒の興味・関心や意欲の向上につながっている。	A	大学との連携は関係機関との連携を維持しプログラムを継続する。
高校生国際会議(WWLのプログラム)の生徒による自主的な企画・運営 *参加生徒の満足度、昨年度以上	WWL推進委員会のサポートのもと、1,2年生の有志(約30名)が自主的に連携校の高校生と協働し、国際会議のプログラムを企画・運営した。 *高校生国際会議の参加者(国内海外の高校生)の事後アンケートでは、「全体の満足度」が91.3%(昨年度73%、一昨年度67%)であり大きく上昇している。	高校生国際会議の準備運営等は生徒の希望を尊重しながらサポートした。	A	高校生国際会議は生徒が運営にかかわり年々改善され充実している。	A	高校生国際会議は、本年度の課題と成果を検討し、よりよい方法で実施する。	

(2)a 一人一人の進路実現をサポートするため、効果的な情報活用と組織的な指導を進める。	進路研究部によるガイダンス機能の充実 外部講師・卒業生によるガイダンス、大学見学会の充実 *学校診断アンケート(生徒)の進路指導に関する肯定的意見 90%以上	進路ガイダンスを、生徒を対象に、年間3年生9回、2年生3回、1年生1回実施した。また、保護者を対象に、年間3年生4回、1,2年生各2回(PTAとの連携含む)実施した。 当初の予定どおり各学年で実施した。 *「学校では進路について考える機会がある」の肯定的意見 90.3%(昨年 96.3%)	2年生の模試結果を分析し、今後の学習の方向性を共有し、意欲喚起させた。 生徒の進路希望に沿うように講師・卒業生を選じた。	A	国立・私立大学の総合型選抜入試での進学者が増加しており、「教科」や「グローバル探究」「WWL事業」の成果が得られている。 進路ガイダンスの充実が、生徒のアンケート結果に反映されている。	A	引き続き第1,2学年へのガイダンスの時期や内容について検討が必要である。
	第3学年「グローバル探究Ⅲ」を活用した進路指導と、大学進学に向けた進路指導の充実	一人一人の進路に関する相談機能や個別の面接指導・論文指導を充実させ、多くの生徒が、進路選択や総合型選抜入試等でその学習を生かすことができた。	推薦型入試が増える中、グローバル探究Ⅲを活かした進路設計ができた。	B	WWLの取組によって、それぞれが明確に進路を決定しており、結果に反映されている。	A	次年度も本年度のカリキュラムを検証し、改善していく必要がある。
(3)a 生徒が主体となる場や自己を振り返る場を通し、「自主自立の精神」や「人権尊重の精神」の涵養と、自己教育力の育成を図る。	生徒主体の学校行事を通じた自主自立や人権尊重の精神の涵養 *学校診断アンケート(生徒)の自主性に関する肯定的意見、及び、講演や体験活動等授業以外の学習の機会に関する肯定的意見 90%以上	文化祭、体育祭、球技大会等の学校行事は、生徒会や各委員会等の生徒が中心となり企画・運営された。異学年の生徒が協働して課題を解決する過程を通して、自主自立の精神や人権尊重の精神が涵養・継承されるよう組織的にサポートした。 また、生徒指導部と人権教育推進委員会が中心となり、ホームルームや外部講師による講演、全校集会での講話等を通し、人権を考える機会の充実を図った。 *「学校は生徒の自主性を大切にしている」肯定的意見:93.5%(昨年 93.4%) *「学校は講演や様々な体験活動等、授業以外の学習の機会がある」肯定的意見:90.3%(89.9%)	生徒会や各委員会では、昨年度の成果と課題を踏まえながら企画・運営するようサポートした。また、教員の働き方改革を進める中で、出来る限り生徒の活動時間を確保するよう工夫した。	A	学校行事その他で、生徒が活発に発案し、附高生らしく企画・運営している様子がよくわかる。	A	引き続き、生徒の企画・運営による学校行事の活性化に向けて支援する。人権尊重の精神の涵養については、人権委員会と生徒指導部が連携し、外部人材の活用も含めて計画的に実施する。

	<p>教員の働き方改革を進めつつ、学校行事や部の活動時間を確保する。</p> <p>*学校診断アンケート(生徒)の学校行事等に関する肯定的意見 90%以上</p>	<p>部活動指導員の活用や当番制の導入等により、生徒の活動時間を確保しつつ、休日や居残り等の教員負担を軽減させた。</p> <p>*「学校は学校行事や部活動等生徒の活動が活発になるようにしている」肯定的意見:82.1%(87.4%)</p>	<p>生徒指導部が中心となり、当番制を活用した時間確保を工夫した。</p>	B	<p>部活動指導員の活用がさらに有効に定着できるように課題を検証するとよい。</p>	A	<p>当番制や部活動指導員の制度の検証を行い、より有効に活用するよう検討していく。</p>
b 少人数規模の良さをいかし、生徒一人一人に寄り添い、個を伸ばす。	<p>個々の生徒へのきめ細かな指導、寄り添う指導を通して、一人一人のよさを伸ばす。</p>	<p>定期の会議での学年団による情報共有や、全教員間の情報共有を徹底した。</p>	<p>学年団を中心に組織的な指導の充実を図った。</p>	A	<p>今後も外部専門家による研修等を継続していくとよい。</p>	A	<p>専門家の研修などを計画的に実施する。少人数規模の良さをいかした一人一人へのきめ細かな指導を継続する。</p>
c 安全・安心な学校づくりへの取組を充実させる。	<p>地域の関係機関と連携した防犯訓練・防災訓練を通して、教職員や生徒の学校安全の意識を高める。</p>	<p>学校安全主任が中心となり、平野五校園や警察・消防、地域と連携しながら、計画どおり防犯・防災訓練を実施した。訓練では、生徒に様々な場面での危険を想定させ自身の行動について考察させる等、学校安全や危機対応に関する意識を高めた。</p>	<p>事象が生じる多様な場面を想定すること、警察や消防等から専門的な助言を得て日常の学校安全に反映させることに努めた。</p>	A	<p>訓練は工夫され生徒の動きもよい。様々な事象が予想されるため日常的に考える習慣が大切である。高校生として公助の視点も持ち合わせると、なおよい。</p>	A	<p>引き続き各関係機関と連携し、設定を変えて訓練を行うなど、安全への意識を高める工夫を行う。自助・公助・共助の視点から考える学習機会をもつ。</p>
	<p>学校の施設・設備の安全点検、防犯体制の点検を定期的に行う。</p> <p>*学校診断アンケート(生徒)の施設・設備、学校安全に関する肯定的意見 90%以上</p>	<p>校舎や体育施設等の施設・設備の点検を定期的に行い、適宜、必要な措置を講じた。また、事務職員、警備員、中学校教員等と連携し、防犯体制の点検を定期的に行った。</p> <p>*「学校の施設・設備は事故防止・安全面で満足できる」肯定的意見 75.6%(89.9%)</p>	<p>教職員間のヒヤリハットの情報共有、学校安全主任による点検等を行った。</p>	C	<p>今後も、同じ校舎にある中学校との情報共有を図っていくことが大切である。</p>	A	<p>施設設備の老朽化も含め、管理職、学校安全主任等による日常的な安全点検や教職員間の情報共有を絶やさず、学校安全に努める。</p>

(4)平野五校園における共同研究と教育実習の推進、セーフティプロモーションスクール(SPS)認証への取組を推進する。	平野五校園「共同研究」を推進する。	大学と連携しながら、「主体性の評価に関わる研究(主体性コモン・ルーブリック)」を進めた。五校園が協働できる特色をいかした研究と、発表会(11月)のあり方、令和7年度以降の研究について、五校園の研究部を中心に検討した。	参観者にとって意義のある研究発表会のあり方を検討し工夫した。	A	五校園ならではの長期的視点に基づく研究である。研究発表会では様々な取組が理解できた。	A	平野地区の特色を発揮した研究となるよう、他校園と連携・協働し研究活動を発展させる。
	平野五校園「連携型教育実習」を推進する。	五校園の各教育実習生が、他校園の教育実践についても体験できる機会を設定し、実習を行った。	各学校園の教育方針とそれぞれに応じた指導・支援のあり方について理解が深まる実習とした。	A	実習生の評価をもとに、貴重な体験ができる実習として継続してほしい。	A	実習後の実習生の評価を検証し、実習内容の工夫・充実に取り組む。
	SPS 認証に向けた準備を進める。	五校園の合同防犯訓練・防災訓練、平野区役所等の関係機関・地域・保護者と連携した防災プロジェクトを総括し、SPS 認証に向けた準備を進めた。	関係機関・地域・保護者との連携について整備を進めた。	C	次年度の認証に向けて準備を進めてほしい。	B	認証に向けた準備を進める。
(5)教職員の働き方改革を推進する。	教職員の働き方改革に資する仕組みを大学と連携して導入する。	会議時間や委員会等の見直しに取り組むほか、部活動指導員、採点システム、当番制、留守番電話、保護者への連絡システム等の導入・活用を図り、業務の効率化を進めた。引き続き課題と改善策の検討・実施が必要である。	勤務時間の削減だけでなく、校務の整理と効率化に着目した改善に努めた。	B	教職員の勤務意欲や生徒の受けとめに留意しながら進めることが必要である。	A	教職員の「はたらきがい」や生徒の認識にも留意しながら、本年度の取組を検証し工夫・改善を続ける。